

西教寺

西教寺は、琵琶湖を見渡せる比叡山の麓に位置しています。7 世紀に聖徳太子（574–622）によって創建されたと伝えられています。この寺は、仏教の天台宗真盛派の開祖である僧の真盛（1443–1495）とは切っても切れない関係にあります。

真盛は、この寺を不断念仏を唱える場所にしました。不断念仏では、阿弥陀仏の名前を継続的に唱えます。10 回唱えるごとに鐘が鳴らされます。西教寺の僧たちは、今でも交代で本堂で不断念仏を唱えることで、悟りを開こうとしています。ただし現在では、夜間は行われていません。

現在の西教寺の建造物は全ては、1571 年に織田信長（1534–1582）によって焼き払われた後に再建されたものです。信長は日本全国を自身の統治下で統一しようとし、自身に対抗した政治的に強大な寺の多くを破壊しました。しかし、西教寺の場合、信長の家来だった明智光秀（1526–1582）が早期の再建の手配をしました。光秀は西教寺が菩提寺で妻とともに西教寺の境内にお墓があります。西教寺には明智光秀本人が署名した巻物もあります。

現在の本堂が建てられたのは 1739 年で、全てケヤキで作られています。それ以外の部材は、釘を含めて一切使われていません。重要文化財に指定されています。中では、平安時代（794–1185）から伝わる 2.7 メートルの阿弥陀仏像が室内で圧倒的な存在感を放っています。また正面の楣には歴史上の釈迦の 16 人の弟子の彫像があり、水晶で作られた目がはめ込まれています。常に念仏と鐘の音が聞こえることで、このお堂には異世界のような雰囲気広がっています。いたずら好きそうな猿の像もあります。これは比叡山に住む野生の猿をかたどったもので、猿は寺を守る存在であると信じられています。

本堂の横には大きな客殿があり、これは京都の伏見城から移されたもので、重要文化財に指定されています。客殿には 5 つの部屋があり、どれも襖や壁には異なる絵が描かれています。制作したのは有名な狩野派の絵師たちです。狩野派を代表する絵師である狩野永徳（1543–1590）が描いた可能性もあります。

客殿には、17 世紀に遡る、周囲の山を借景した伝統的な庭園もあります。琵琶湖のような形をした池があり、その周囲の地面は滋賀県のような形をしています。創建した僧である真

盛を祀る創建者のお堂の正面の装飾的な唐門を通して見ると、本物の琵琶湖を最も美しく眺めることができます。西教寺の正面参道には楓、桜、およびサツキが並び、春と秋には鮮やかな色に包まれます。